

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供					
実践名	教育相談在り方、記録票の見直し	所 属		3年（学年付）		
		職・氏名		教諭 金子 亘喜		

1 実践の概要

教務部、支援部で行っている中学3年生対象の教育相談実施に当たり記録票1（中学校記入）、記録票2（受検生保護者記入）の用紙が届く（昨年度から本庁作成）。それを踏まえ、入学に関わる教育相談の内容については、各学校でそれぞれである。数年前までは入学者選考検査の概要説明、本校の教育内容等の説明、校内見学で教育相談を終えていたが、より詳しい情報や生徒自身での言語能力を見るために聞き取りを行っている。生徒の実態も変化する中で聞き取る内容に関しても変更してきている（支援部と連携したことで見える部分が増えた）。受検に当たり願書や調査書が実際に届く前に、ある程度の生徒や家庭の情報をこちら側で把握しておきたいという考えもある。

2 実践の内容

様式の見直しを今年度の教育相談から取り組んだ。20分程度で聞き取れる内容で進めている。発言したことを記録するのはもちろん、保護者や引率教諭の様子も含め、答えているときの状況を全体的に把握する。来校者の人間関係、生徒の様子、保護者（先生）の生徒への関わりなどもより見えるようになってきた。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

（教育相談の実際）教務部では、入学者選考検査の説明や本校の教育課程・就学奨励費等についての説明を行っている。支援部では、生徒への聞き取りや全体的な様子観察を含め見ている。複数で取り組むことで、来校者の実態把握に関してはもちろん、多面的な見方ができ、教育相談においても、ある程度の情報を得られる場面として今後も運用していく。ちなみに支援部主導ではあるが、入選というはっきりとした目的のための相談のため教務部も入り、2分掌の複数で対応している。2時間半程度かかるので、もし一人でこなすことになるのであれば、聞き取り等行わないで説明・校内案内のみ対応となり、得られる情報も減ることになる。上記に述べた観点を意識した場合、複数対応が妥当と考える。

<実際の聞き取り用紙>

教育相談（中3）

（※）本用紙は、教育相談の記録として活用する。教育相談の内容は、必ずしもこの用紙に記入する必要がある。また、教育相談の内容は、必ずしもこの用紙に記入する必要がある。また、教育相談の内容は、必ずしもこの用紙に記入する必要がある。

1. 教育相談の目的は何か？

2. 教育相談の場はどこ？

3. 教育相談の時間は？

4. 教育相談の参加者は？

5. 教育相談の進行は？

6. 教育相談の結果は？

7. 教育相談の振り返りは？

8. 教育相談の今後の展望は？

9. 教育相談のその他の事項は？

10. 教育相談のその他の事項は？

11. 教育相談のその他の事項は？

12. 教育相談のその他の事項は？

13. 教育相談のその他の事項は？

14. 教育相談のその他の事項は？

15. 教育相談のその他の事項は？

16. 教育相談のその他の事項は？

17. 教育相談のその他の事項は？

18. 教育相談のその他の事項は？

19. 教育相談のその他の事項は？

20. 教育相談のその他の事項は？

教育相談の振り返り

1. 教育相談の振り返りは？

2. 教育相談の振り返りは？

3. 教育相談の振り返りは？

4. 教育相談の振り返りは？

5. 教育相談の振り返りは？

6. 教育相談の振り返りは？

7. 教育相談の振り返りは？

8. 教育相談の振り返りは？

9. 教育相談の振り返りは？

10. 教育相談の振り返りは？

11. 教育相談の振り返りは？

12. 教育相談の振り返りは？

13. 教育相談の振り返りは？

14. 教育相談の振り返りは？

15. 教育相談の振り返りは？

16. 教育相談の振り返りは？

17. 教育相談の振り返りは？

18. 教育相談の振り返りは？

19. 教育相談の振り返りは？

20. 教育相談の振り返りは？

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	個に応じた個別面談の在り方	所 属	3 学年（学年付）
		職・氏名	教諭 中島 朋之

1 実践の概要

本校の入学生徒の多くは、志望理由に今金町の就労支援の手厚さ、本校の就労実績を挙げ、本人も卒業後に一般就労を希望していることを挙げる。それを受け、各学年で進路外勤・学級担任を中心として年間をととした進路希望の方向性、現場実習・個別実習先、卒業後の生活を考えることを生徒・保護者と個別面談をとおして行っている。その内容を3年間の流れに沿ってこのレポートにまとめた。

しかし、昨年度末から新型コロナウイルス感染症の影響で臨時休校や保護者来校制限が行われ、なかなか三者面談ができないでいる。

2 実践の内容

入学後のゴールデンウィーク前参観日に進路外勤からオリエンテーションとして新入生・保護者に3年間の進路指導の流れを説明する。その説明後に1学年進路学習アンケートを実施して、その結果を基に5月下旬から第1回個人面談が行われる。これは、1年次現場実習の原案になるもので、基本的に生徒・保護者・学級担任の希望が一致すれば、その希望に沿って実習先を絞っていくが、希望が一致しない場合は調整を行うことになる。しかし、このアンケート時には生徒・保護者ともに本校の就労状況や障害者の就労形態などをしっかり理解していないことが多いため、その説明をしながら、現場実習で「自分を知る」「働くことを知る」ことを指導する。

実習後に第2回個人面談を行い、引率者や事業所の評価を基に生徒の課題や改善点を確認する。そして、冬季休業中に「進路希望調査（第一次）」を実施して、その結果と学級担任の希望を加味したのち1月下旬から第3回個人面談を行い、2年次現場実習先候補を検討していく。それを受け、2年次ゴールデンウィーク前参観日に保護者に現場実習先を説明する。実習後に第4回個人面談を行い、「（一般就労か福祉的就労かの）見極め」を確認する。事業所の評価を基に生徒・保護者・学級担任と2学期の個別実習準備を始める。2学期になり8月下旬から第5回個人面談を行い、第1回個別実習先を確認する。そして、第1回個別実習後に生徒の力量が事業所の希望に合っているか？次年度の採用に結び付く可能性があるか？等を実習評価や事業所の声から細かく分析して第6回個人面談を行うことになる。もちろん、生徒の自己評価が

高くても事業所の評価が低い場合や生徒の希望とかけ離れた実習先だった場合は、他の事業所で第2

イメージ図

- ① 入学
- ② 参観日
- ③ 進路学習アンケート
- ④ 第1回個別面談
- ⑤ 1年次現場実習
- ⑥ 第2回個別面談
- ⑦ 進路希望調査（第一次）
- ⑧ 第3回個別面談
- ⑨ 2年次現場実習
- ⑩ 第4回個別面談
- ⑪ 第5回個別面談
- ⑫ 第1回個別実習後
- ⑬ 第6回個人面談
（第2回個別実習後、個人面談）
- ⑭ 進路希望調査（第二次）
- ⑮ 第7回個別面談
- ⑯ 第8回個別面談
- ⑰ 3年次現場実習後
- ⑱ 第9回個別面談
- ⑲ 第10回個別面談
- ⑳ 卒業

回個別実習を行うことになる。この個別面談は前提実習に結び付くまで続くことがあり、個別実習を複数回行う生徒も現れる。また、この個別面談や個別実習の結果を基に2学年の冬季休業中に「進路希望調査（第二次）」を実施して、3学期に第7回個人面談を行う。この面談によっていよいよ進路希望が最終決定に導かれることになる。

3年次は、見学旅行があるため5月末から体育祭後の6月末に第8回個別面談を行っており、その中で、前提実習への心構えや卒業後の生活を見据えた内容も話し合うことになる。やはり、3年次現場実習が前提実習となることから生徒・保護者ともに受験同様の心構えとなり、決意のブレない生徒・保護者が多い。そして、前提実習でしっかり「(卒業後の進路を) 決定する」ことができたかを実習後の第9回個別面談で確認して内定後の実習先利用の意思確認を行う。卒業前の第10回個別面談は、行政手続きや事業所・企業の事務手続き確認が多いので確認・再確認を心掛けている。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

上記に述べた個人面談は、あくまでも一般モデルであり、進路希望は絶えず変更の繰り返しである。それは、生徒がなかなか仕事に対するイメージをつかめないでいるからだと思われる。そのため、作業学習や現場実習で実際に働くことを体験する場面がとても大切になってくる。本校では、作業学習や現場実習に多くの時間を設けている。生徒も3年間の教育課程で自分の進路をしっかり決め卒業している。

しかし、今年度の3年生は昨年度末から新型コロナウイルス感染症の影響で臨時休校や保護者の来校制限が行われ、なかなか三者面談ができないでいる。そこで、生徒との個人面談の内容をすぐに家庭連絡し、保護者の理解や協力をいただきながら進路指導を進めたが、保護者にとっては、進路先が2学年次の個別実習先でもあったのでイメージがわきやすく滞りなく手続きを進めることができた。そのことは、事実習先にもいかされ、新型コロナウイルス感染症の影響で前提実習の内容に制限があっても2学年次の個別実習の様子を加味して評価をいただいた事業所も多かった。いろいろな場面で2年次の個別実習の繋がり功を奏したと考えている。

しかし、現在の新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みると新年度においても状況が劇的に改善されるとは考えにくい。そのため、来年度も進路指導計画の変更を余儀なくされることを想定して進路指導を進める必要がある。

特に、進路指導部は外部機関との連絡調整が主な活動になることから、時間に余裕を持ち、適切な時期に事業所・生徒・保護者・学級担任と必要な情報を交換しながら個々の進路指導を進める必要がある。いくら学校が生徒に指導を続けても生徒・保護者の意識が高まらなければ進路決定には結びつかないので、進路指導部と学級担任が連携を図り、進路実現に向けて生徒・保護者が主体的に取り組むことができるような個別面談の実施が求められている。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	作業学習における MT と ST の協議方法 の工夫や単元計画の工夫	所 属	窯業科2年（担任）
		職・氏名	教諭・石川 誠

1 実践の概要

本校の窯業の作業学習では、皿やカップを作製している。作製した製品は学校祭や販売会などで販売し、販売について学習している。製品の作製と販売の2つを通して、生徒に集中力やコミュニケーション能力など卒業後の就労に対する取り組み方を身に付けることが作業学習における目標となっている。窯業製品の作製方法は、板のぼし、鋳込み、より作り（ひも作り）、電動ろくろ（水ひき）など多種多様である。窯業科の製品は、成形や素焼き、はっ水剤、釉薬、本焼きなど様々な工程を経て完成する。このことから、生徒の実態に合った窯業製品の作製と長期的な計画を立てて、見通しをもって取り組ませることが大事であると考えた。また、丁寧に製品を作製させたり、報告させたりするだけではなく、製品の個数目標を持って作業学習に取り組むことがより教育効果が得られるとも考え、長期的な単元計画を立てることにした。初めて窯業科の作業学習の MT を受け持ったこともあり、大まかな窯業の作成過程などは理解していたが、詳細までは分からないことが多かったため、窯業について豊富な知識と経験がある ST と協議をしながら単元計画や一日の授業計画を立てた。

2 実践の内容

始めに、学校祭で販売する製品として、生徒に何を作製させればよいのかを1年次の系統性や生徒の実態、作製方法の難易度などを考慮しながら、ST と協議しながら決めた。学校祭は約6か月後であったため、長期的な計画は大まかな計画にとどめておいた。まずは、生徒の成形の練習期間を設けた。その後、一日の成形の目標個数を生徒の無理のないように決めて、その個数を作製するように促した。生徒は、達成できる日もあれば、できない日もあったが、目標に向かって作製することができた。成形以外の作業も同様に、一日の目標数を提示して、作業を進めた。その間、ST と授業で行う作業内容や生徒の目標個数を確認しながら、学習指導案を作成していった。

ある程度めどが立ってきた学校祭2か月前には、学校祭で販売する個数を ST と協議して決めることができた。生徒には、学校祭まであとどのくらいの製品を作製しなければいけないのかということを伝え、毎時間残り製作個数を更新して提示した。生徒はゴールが見えたことにより、積極的に取り組む姿が見られた。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

学校祭での販売学習に向けて、一日の作業学習で行う個数目標を提示していたが、途中から残りの目標を提示したことで、生徒がより見通しをもって作業を行うことができるようになった。今後は、作製する期間と販売する製品の目標個数を提示して、生徒自身が一日の作業学習でどのくらい作製すれば良いのかを考えながら作業に向かっていけるようにしていきたいと考える。

最初は、ST との協議時間が長くなったり、確認することが多くなったりすることが多かった。後半は、徐々に窯業製品の作業内容の全体を見通すことや作業内容の詳細が理解できるようになってきたことにより、ST との協議時間も短くすることができてきている。今後も ST と協力しながらより良い授業になるようにしていきたい。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	作業学習を「主体的、対話的で深い学び」につなげるための授業計画の工夫	所 属	家庭総合科3年（担任）
		職・氏名	教諭・亀田 倫代

1 実践の概要

本ホームルームの生徒は、一人でコツコツと地道に取り組むことが得意だが、他者と協力して作業することが苦手である。そのため、他者と一緒に働くことで作業効率が上がるということを実感できる学習を計画した。また、その考え方を最終的に個人で活用できるようにすることを目的として、1年間の授業計画をもとに授業の実践を行った。

制作する個数と、締め切り日を明確にして、分業するか個人で取り組むかを検討した。また、共通の目的を達成することをPDCAサイクルで繰り返すことで、他者と一緒に働く際に必要な考え方の定着をねらい、以下の年間指導目標をもとにおおまかに3期に分けた計画に沿って学習を進めた。

・年間指導目標「自分たちで、作業計画を話し合って実行することができる。」

- 1 学期：時間の考え方や連携の仕方を知る
- 2 学期：製品数を増やし、チームごとの実践
- 3 学期：定着の確認のため個人で実践

2 実践の内容

(1) 1 学期：時間の考え方や連携の仕方を知る。

ア 校内マスク販売、名刺納品

最初に、自分用のマスクを個人で製作し、だいたいどのくらいの時間がかかるのかということや、自分の得意な作業と難しかった作業を把握させた。その後、作業工程を分け、それぞれが得意な作業部分を担当し、流れ作業でマスクを制作した。また、数学でそれぞれに掛かった時間を基に比較して、結果的に一人で作り続けるよりも分業する方が、掛かる時間が短いことが分かった。

また、生徒の実態も考慮し、名刺班とマスク班にチームを分け、同時に2つの製品に取り組んだ。この学習では、自分のチームだけではなく、他のチームの仕事も終わることで、全体で請け負っている仕事が完了するという取り組み方や考え方ができるよう、進捗表を比較しながら、必要に応じて別のチームの作業を行うこととした。

イ ペリカ旧石器会館へのレターセットの納品

納品日を明確に設定し、1日に漉くことのできた紙の枚数を基に見通しを立てた。全員で状況を共通理解するために、毎回、進捗状況を簡易的な表に記入した。この際、なるべくシンプルで視覚的に分かりやすいものであることを心掛けた。また、数学の時間を使い、計画の見直しを数回行った。

1 学期以降も、このサイクルと考え方を基本として、学習の題材の難易度を上げ、支援の数を減らしながら繰り返して行った。

(2) 2 学期：製品数を増やし、チームごとの実践。

毎回、進捗状況の確認と自分たちで役割分担を行いながら進めた。

ア 学校祭製品作成

(f) 紙製品、石けんチーム（4 名、4 製品）

(g) 縫工製品チーム（3 名、4 製品）

(3) 3 学期：定着の確認のため個人で実践

ア 卒業制作

成果

(1) 自分たちで役割分担をして、取り組むことができるようになった。

(2) 作業内容を提示しなくても、その時間でやることを把握し、自主的に始められるようになった。

(3) 隙間時間の使い方が上手になり、個人差はあるが、効率良く取り組めるようになった。

課題

実態差によるが、実生活での応用や個人での活用、知識の定着までは難しかった。その理由の一つとして、作業に取り組む前の段階に、経験済みのことであっても、取り組むことをリスト化することを自分の力で行うことが難しい生徒が多かった。取り組むことを、順番に思い出し、リスト化するまでの方法に関して、個々に応じた学習を設定することが必要だった。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

1 年間のおおまかな授業計画に沿って、学習の題材を設定する際に、本校で実践している町内への納品は、納品数や納品日が明確にすることができ、大いに活用することができた。また、紙すきの作業は、成果を数字として表しやすいため、数学を活用しながら、見通しを立てるのに効果的な学習にすることができた。

生徒の実態に関して、この学習を行ったことで「取り組むことをリスト化し、自分で見通しをもてる。」「取り組むことを自分でリスト化はできないが、リスト化されたものの順序を考えることができる。」「取り組むことがリスト化されていても、順序を考えることが難しい。」の3つの段階の実態があることが分かった。この実態把握の結果を、様々な学習場面での適切な学習支援の度合いを測る一つの基準として活用することができた。

一定の成果はあったが、重要となる知識の定着や3つの段階をそれぞれどのようにステップアップさせていくかという部分においては成果を出すことができなかった。作業学習だけで定着させることは難しいため、今後も教科等横断的な学習を継続していくことを意識的に取り組んでいきたい。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供				
実践名	看板標示の工夫	所 属	農業科		
		職・氏名	実習助手・飯嶋 翔世		

1 実践の概要

本科では、前年度の卒業生が圃場に設置するための看板を制作し寄贈してくれている。今年度はそれに作物ごとの標示をつけていくのだが、設置期間の約4か月間、雨天に耐えうる看板にするにはどうすればよいのかを、生徒に対話的な学びをとおして考えさせた。その際、次の点を実現できるような条件を提示した。

- ・整備性を考慮し、少ない材料で工夫して制作することができる。
- ・手先の不器用な生徒でも制作することができる。
- ・ラミネートフィルムの熱圧着を応用し、防水対策をすることができる。

そこで、雨天時にガラス温室内作業班と看板制作班に分かれて作業を進めることにした。

2 実践の内容

まずはじめに、用紙をそのままラミネートフィルムでとじ、画びょうで固定する方法で制作した(写真1)。これにじょうろで水を当ててみたところ、固定した際にできた隙間からの浸水が起ることを確認させた。この事実と、補修の手間をできるだけ省き、なおかつ誰でも制作可能な看板を作りたい旨を生徒に伝え、話し合いを始めさせた。

最初に出た案は、看板をビニールで覆う(写真2)ものだった。防水はできるものの、ビニールの性質上、風であおられることで固定部分が次第に伸びて破損してしまったり、日光に当たり続けると曇る可能性が高い。加えてビニールという物が増えることでの手間がかかる。また、貼り付ける際に緩まずに固定するのは手先の不器用な生徒には困難であるとの意見が出た。

次に指導者から、ラミネートされた縁の部分で熱圧着が起きることで、圧着部は真空状態になっていることを説明した。すると生徒から、その部分を広げるために用紙の四隅を切り取ってみてはどうかという案(写真3)が出た。そうすれば材料はラミネートフィルムと用紙の2つだけであり、圧着部に画びょうで穴が空いても浸水することは無いというものである。話し合いの結果その案が採用され、まずは固定を画びょうで行い設置した。その後何度か風雨にさらされているが、破損や浸水は確認されていない。引き続き経過観察を行うこととした。



写真1



写真2



写真3

3 実践の振り返り(今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて)

今回の実践で、話し合いの全てを生徒に任せるのではなく、指導者が実現したいことに向かうためにヒントとなるワードを段階的に生徒へ提示することで、「対話的な学び」につながっていくことがわかった。今後は教諭とより一層連携し、「主体的な学び」や「深い学び」につなげられるようにしていきたい。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	① 実態把握 ② 授業計画 ③ 教材教具 ④ 授業展開 ⑤ 学習評価 ⑥ 情報提供				
実践名	作業学習の礼儀、道具の名前や基本作業の工程（手順）を分かりやすくするための動画の制作	所 属	窯業科1年（学科付）		
		職・氏名	教諭・内田 義文		

1 実践の概要

入学後作業学習における入退室などの礼儀作法や声掛けなど、作業学習特有のものがあるため定着するには時間を要してきた。また、各種道具の名前や保管場所、清掃手順といった作業以外の部分でも覚えなければならず、1年生の1学期は製品作り以外にも生徒にとっては重要な内容となっている。これまでは口頭や見本で示してきた内容であるが、コロナ対応として密を避け、障害の特性も考慮し、映像（画像）にまとめてみた。

【内容】

- ①入退室の言葉 ②身支度の仕方 ③道具の名前、管理場所 ④道具の配置（作業台上）
- ⑤片付け、清掃道具の扱い方、清掃の仕方

2 実践の内容

入学当初に行う内容のため、同内容の実践を行うことはなかったが、「よりづくり」など道具の細かな操作を伴う導入の場面において、「ビデオカメラで撮っている映像をリアルタイムでモニターに流し、作っている動画を流し作っている側の目線で確認する形の学習を行った（密防止も考慮）。今後のコロナの状況や生徒の障害の状況を考えると、映像（画像）を通じて繰り返し確認や振り返りなどに活用できる。また、作業担当が変わった場合にも有効であると思う。

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

今後の実践に向け、映像や動画は有効で活用していく意味があると思う。特に物を作るにあたり道具の微妙な操作や手順などとグループや技術的に同程度の仲間と確認する中で、対話的で主体的な活動になるようモニターやiPadなど活用していきたい。



*PP で提示する場合と、全てではないが動画で指導する。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供				
実践名	パワーポイント（PPT）、ワークシートの工夫	所 属	1 学年		
		職・氏名	養護教諭・高野 木乃美		

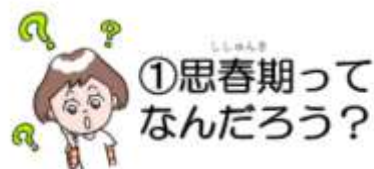
1 実践の概要

1 学年の生単で心とからだの授業を行うにあたり、高校生にとって性の問題は、いつ自分の身に振りかかってもおかしくないことである。その問題が時には人生を左右する場合もある。また、性に関する悩みや不安を抱える生徒が頼ってしまうのは、簡単に検索できるスマートフォン等のインターネットではないか。しかし、誤った情報を見たり、記述されていることを正しく理解したりすることができず、曖昧な情報をそのまま知識としてしまうことも少なくないだろう。そこで、教材を工夫することで、生徒が関心や意欲をもって、「わかった」「もっと知りたい」と学習に臨めるのではないかと考えた。

2 実践の内容

PPT とワークシートを作成するにあたり、情報探しとして3つのことを実施した。1つ目に関連する資料をいろいろな媒体から探すこと、2つ目に前年度の使われている教材を集めてみることに、3つ目にインターネットでの検索を活用することを実施した。その集めた中から、今回の授業や単元のねらいや生徒の実態に合ったものを選び出し、担当教諭と内容を十分に検討したうえでPPT とワークシートの作成をした。作成するにあたっては、イラストを用いた視覚的に訴えること、楽しく分かりやすく学習できて正しい知識を身に付けられることができること、解答を書き込むだけの作業プリントになってしまわないことに留意して作成した。

ワークシートは、視覚的に分かりやすい図の工夫、簡潔で分かりやすい質問文にすることで、自分の考えを書いたり発表することができ、関心や意欲をもたせることができた。話し合いの場面では、ワークシートに書いたことを基に意見を出し合って話し合い、深められている様子も見られた。しかし、授業展開のまとめ部分にあたる振り返りを書く項目がなく、その時間で学んだこと、できたことやできなかったことを自分で振り返ることができず、ねらいに対して自己評価せずに終わらせてしまった。



実際の PPT スライド（一部）

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

今回の実践を通して、担当教諭と内容を検討し、ねらいや生徒の実態に合わせた PPT やワークシートなどの教材を工夫することで、生徒は関心や意欲をもって学習に臨むことができた。後日見返したときにも授業内容が分かるようなワークシートの作成が大切であると分かった。また、養護教諭の専門性を活かし、生徒が関心や意欲をもつてからだの事実と生活や心の問題を関連させ、疑問を持ち掛け、思考させながら納得に結び付けられるように、今後も教材を工夫していきたい。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供				
実践名	ホームページや玄関のモニター等を活用した主体的な学びの促し	所 属	農業科1年（学科付）		
		職・氏名	教諭・小林 和幸		

1 実践の概要

令和2年度入学生は、入学後間もない4月20日（月）から5月31日（日）の42日間、臨時休業として約1か月半を家庭学習に充てることとなった。通常であれば、学校に慣れつつ、本校の学習スタイルの基本が身に付いてくる大切な期間になるはずであったが、新型コロナウイルス感染予防のため、学習計画の大幅な変更を余儀なくされた。しかしながら、臨時休業は生徒にも教員にも時間的余裕を生み出した。これを今後に備えるための有効な期間でもあると捉え、生徒の主体的な学びにつながる自主的な行動を促すきっかけを与える期間にしようと考えた。

そこで、生徒が興味関心を持ちやすいICTを活用した次の2つの方法をとることにした。これらの取り組みにより、生徒の興味関心が高まり、自ら行動に移す機会が増えるのではないだろうか、そして、主体的な学びにつながっていくのではないだろうかと考えた。

(1) レッツ エアロビ！

臨時休業期間に家庭でも体力作りができるように本校ホームページ（HP）に体力作りのエアロビクスの動画を掲載する。

(2) 今金電子掲示板

臨時休業終了後に生徒の自主的な行動を促すきっかけとなるように電子掲示板を作成し、コロナ対策と1日の予定、学校の様子等を掲載する。

2 実践の内容

(1) レッツ エアロビ！

体力作りを主に指導している3名の先生に協力をお願いし、エアロビクス動画を撮影していただいた。最初は3種類を作成した。

ア エアロビ初級編1：体力作り1グループ（運動が苦手な生徒向け）に相当（山本先生）

イ エアロビ中級編1：体力作り2グループ（本校の標準的な運動）に相当（中市先生）

ウ 筋トレ1：体力作り3グループ（運動が得意な生徒向け）に相当（海田先生）



写真1 HP 動画掲載画面



写真2 筋トレ1動画

これら3つの動画を1本約3分に編集し、HPへアップロードした。そして、先生たちの協力を

得て、生徒が家庭で使用している情報端末を想定したスマートフォンやパソコン、タブレット等の端末で視聴確認を行い、5月14日（木）に一般公開した。また、公開するにあたって、生徒へ伝えるためのチラシを作成し、課題やお知らせ文書の郵送物に同封し、発送していただいた。そして、約1週間後の5月22日、前回の新鮮さが薄れてきている頃に続編を3本追加公開した。

エ エアロビ初級編2：初級編1の続編（山本先生）

オ エアロビ中級編2：中級編1の続編（中市先生）

カ 筋トレ2：筋トレ1の続編（海田先生）

(2) 今金電子掲示板

玄関ホールに毎日の行事や学校の様子を伝える電子掲示板を設置した。大型テレビとノートパソコンを使用し、パワーポイントのスライドを自動で流している形である。内容は、毎日1日分の行事やその時期の行事等の写真、コロナ対策の画像等である。このコロナ対策の画像は、「いらすとや」と北海道スタイルとコラボしている（株）クリプトン・フューチャー・メディア製のキャラクター「ラビット・ユキネ」を取り入れている。そして、スライドを自動切替するように設定した。最初はこの表示形式に慣れるために1枚10秒と長めに設定し、見慣れてきた2週間後からは歩きながらすぐに次の情報を見ることができるよう徐々に短くしていった。現在は1枚4秒で運用している。

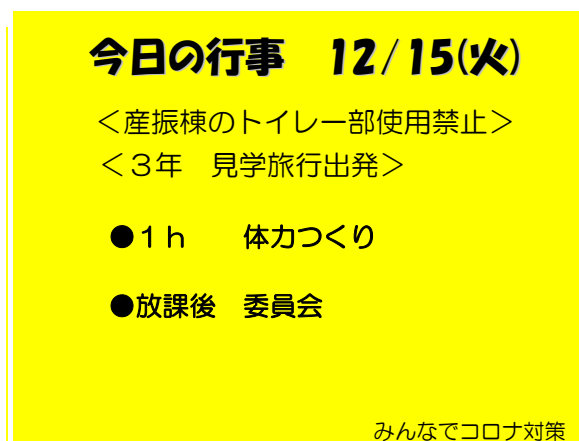


写真3 今金電子掲示板 今日の行事



写真4 今金電子掲示板 学校の様子

3 実践の振り返り（今後の「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて）

(1) レッツ エアロビ！

臨時休業中のHPの閲覧（アクセス）件数^{*1}は以下のようになった（表1、グラフ1）。アクセスは前年同時期よりも今回の臨時休業中のほうが多く、動画掲載後はより一層増加している。特に掲載初日5月14日は460件のアクセスがあり、それ以降もアクセスが増加していることがわかる（グラフの↓印参照）。

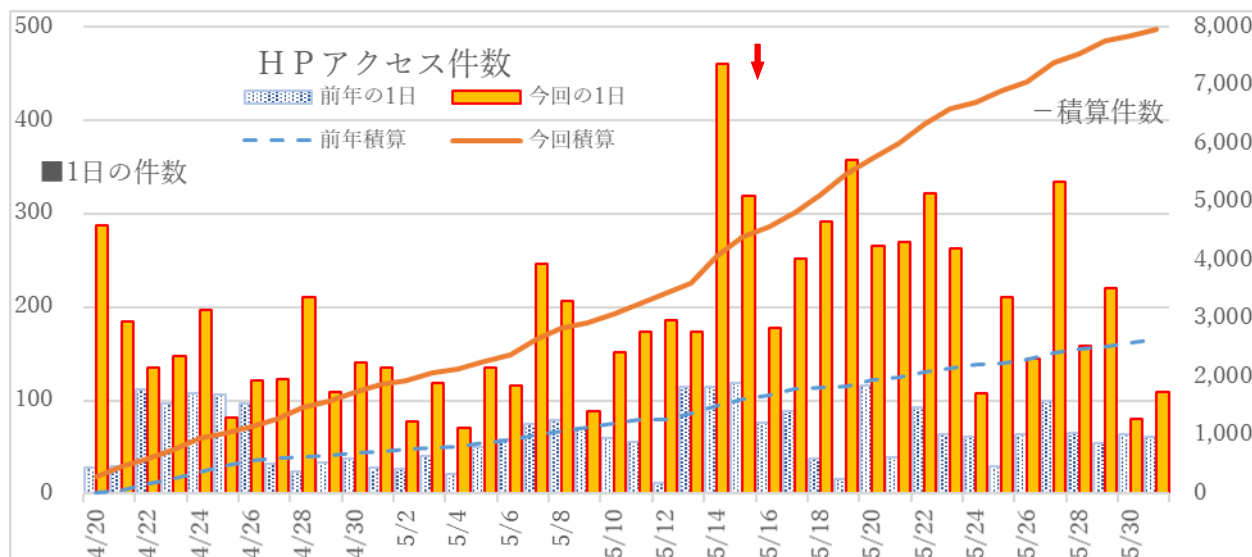
これは、掲載当日にエアロビクス動画をHPに掲載したことを全学級の担任より課題発送の電話連絡時に伝えていただいたことも大きな要因であるが、少なからず生徒がエアロビ動画に興味関心をもったことと学校の取り組みの真新しさに反応したことへの結果であると考えられる。

なお、エアロビクス動画掲載ページだけを見ると初日は142件のアクセスがあった。これは前年同時期の平均件数の2倍以上のアクセスであり、反応の良さが判断できる。しかし、HPは中学校の教員やその生徒、関係機関等からも閲覧されていると思われるため、（保護者を含めた）在校生だけの閲覧とは言えないが、本校の生徒が動画を見ようと行動を起こした結果と考えられる。そして、学校再開後は動画掲載ページへのアクセスは急激に減少し、HPのアクセスも平均的な件数に戻っていった。生徒の興味関心が薄れ、HPと動画を見ようとする自主的な行動が減ったとい

うことである。

	最小	最大	平均	平均の差
前年同時期（4/20-5/30）	11	119	63	基準
今回休業時（　〃　）	71	460	189	+126
動画掲載後（5/14-5/30）	80	460	241	+178

表1 今回休業時と前年同時期及び動画掲載時の閲覧記録



グラフ1 今回休業時と前年同時期の1日のアクセス件数（棒）と積算アクセス件数（折れ線）

*1 今回のアクセス件数は、Google アナリティクスของデータを使用した。HP にもアクセスカウンタは設置してあり、担当者が毎日記録しているのだが、担当者の目視による記録のため記録時間が提示ではない。そのため、記録間隔が24時間とならず、24時間分の正確な件数が記録できていない。よって、今回は24時間分を正確に記録しているGoogle アナリティクスของデータを使用することとした。

(2) 今金電子掲示板

休業明け6月1日から使用を開始したが、生徒が登校時に電子掲示板を気にしている様子はあまり見られなかった。これは、生徒が登校後、すぐに2階の更衣室や教室へ行くルーティーンができていて、時間的余裕があまりない朝に立ち止まるほどの興味関心が湧かないことが要因と思われる。しかし、部活動時や昼休みなどに玄関ホールを歩きながら見ていたり、吹き抜けの2階の廊下から手すり越しに見ている生徒も散見された。その中で、「今日の着替えは窯業科が最初です。」「玄関のテレビと体育委員が言っていたのと違う。」などの声も聞こえ、体力づくりの着替えの順番は見ているということが分かった。

このような生徒の言動から判断すると着替えの順番は、教師からの指示がなくても自ら見る内容であるということ、もしくは、モニターを意図的ではなく風景のように見えても、記憶に残る内容であり生徒の言動を促す効果もあるということが分かった。また、これは生徒へ「電子掲示板を見るように」と、指示をしていない状況での結果であるため、電子掲示板は、生徒の自主的な行動を促すきっかけとして、おおむね良好であったと考えられる。そして、これは予想していなかったことだが、教職員が見ていることが多かった。予定が間違っていたときの訂正や行事写真へのコメントなど、多くの先生から声を掛けていただいた。

電子掲示板は、生徒の自主的な行動を促すものとしてこれからも継続して活用していくことが良いと感じた。生徒も指導者も自分が所属していない学年や学科、部活動等の活動内容を知るこ

とができる校内の HP としての役割も持たせつつ、内容を検討しながら有効活用していきたい。

今回の取り組みで、生徒は、興味関心をもつ内容や生徒にとって必要な内容が提示されると、教員からの指示がなくても生徒が自ら考え、自主的に行動するということが分かった。しかし、HP 動画のように情報の新鮮さやこちらからの促しがなければ、興味関心が薄れてしまい、自主的な行動が少なくなってしまうということも併せて分かった。当たり前とも思われる結果ではあったが、この結果を踏まえて、生徒が自ら考えたり、行動したくなるような仕組みを ICT を活用しつつ、今後も作っていききたい。そして、主体的で深い学びにつなげていきたい。

令和2年度 課題研究 実践レポート

選択項目	①実態把握 ②授業計画 ③教材教具 ④授業展開 ⑤学習評価 ⑥情報提供		
実践名	生徒の印象に残る進路指導教材の作成	所 属	1 学年所属
		職・氏名	教諭・田中 博昭

1 実践の概要

1 学年の生徒は、前年度まで中学生であったこともあり、「卒業後に働く」という意識がほとんど育っていない生徒が多い。

また今年の1年生は理解力、語彙力が弱い生徒が多く、そのため、「働くこと」を「外見的なイメージ」だけで捉えている生徒がとても多い。結果として進路を「一般就労」で希望する者がほとんどであり、現状の実力と乖離した進路選択をしているのが現実である。

これらの生徒に対し、現実即して就労に向けた意識をもたせるためには、「リアルな情報の提供」を主眼として、教授用の教材開発をすることが重要である、と考えた。そして次の3点をポイントに設定して作成した。

(1)イメージの上書き

実習などの「体験」をとおして働くことのイメージを上書きし、理解させること。

(2)経験の共有

卒業生や上級生など、自分たちに近く、「顔が見える」人の体験や経験談をより多く提供すること。

(3)現実の共有

事業所職員との懇談をとおして聞いた、「生の声」をストレートに生徒に伝えることで、コロナ禍での厳しい職場のニーズや実際を「自分ごと」として考えられるようにすること。

以上の点をおさえることで、生徒への直接の進路指導の中で具体的に情報提供し、現実を知ることをとおして、より深く自分の進路を考えることができるのではないかと考えた。

2 実践の内容

総合的な探究の時間での生徒への提示用に作成したスライドの中に、生徒が分かる表現に置き換えた卒業生や施設職員の言葉を積極的に取り込んだ。

進路指導部では、卒業生の卒後支援で訪問した際に卒業生から現状の聞き取りをしており、その中で「在学中にしておけばよかったこと」を聴き取っている。進路に関わる一般的な指導内容は、生徒にとっては「自分ごと」として捉えられないため、なかなか定着しない。一方で卒業生それも直近の卒業生であればなお、働いて感じた「やりがい」、「壁」というのは経験した人の姿が見える(イメージできる)ので、自分ごととして捉えやすい。「今の卒業生の姿は自分の将来の姿になる」からである。

